



TITLE:

勞榦氏の來訪

AUTHOR(S):

日比野, 丈夫

CITATION:

日比野, 丈夫. 勞榦氏の來訪. 東洋史研究 1955, 14(1-2): 158-158

ISSUE DATE:

1955-07-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/139030>

RIGHT:

勞榦氏の來訪

一昨年以來、ハーヴァード大學の客員教授として滯米中であった勞氏が、その任期を終えて臺灣への歸途、日本に立寄られた。七月四日横濱着。三日間の東京滞在をへて、七日夕刻京都着。翌日は早朝から京大人文科學研究所において、われわれ漢簡研究班員と懇談。午後は一時から文學部と東方學會との共催、「漢代における地方文化」の題で法經第五教室において公開講演、吉川幸次郎氏の通譯。

三時からはハーヴァード燕京同志社東方文化委員會の主催、同學顯眞館において「居延漢簡について」の題で講演、あとの質問や意見の交換が盛んであった。九日は奈良行き。まず博物館に至り、黒田館長の配慮で小野勝年氏が東道し、法隆寺、唐招提寺、藥師寺、東大寺、三月堂を見學。敦煌へも行かれた氏にとって法隆寺はもつとも氣に入つたらしい。その夕は漢簡研究班と食事とともにし、從來問題になっていた點について相當つこんだ質疑應答が行われた。十日は文學部陳列館を訪い、午後は梅原末治氏の案内で、大阪の江



法隆寺にて 向つて左が勞氏

口治郎氏の所蔵品を觀覽、平岡武夫氏同行。その夜二時五七分、京都驛より月光號で東京に向つた。十三日の飛行機で臺灣へ歸國のはず。在京中の宿は、とくに立命館大學の平中苓次氏のお世話になつた。勞氏、本籍は長沙、一九〇七年、西安の生れ。三日間を通じて、快活で屈託のない學者的な態度にはきわめて好感がもたれ、またいささかも疲れをみせられない健康さには壓倒された。

氏の談話のうちから、二三、一般的なことがらを摘記しよう。原簡は最初、北京大學、中央研究院、故宮博物院の三箇所に分けて、解讀研究を行うこととなつたが、容易にはかどらなかつたので、徐鴻寶氏の斡旋で寫眞撮影が行われ、勞氏が釋讀を依頼された。原寸大の寫眞焼付正副三通が作られたが、今日では氏が釋讀に用いた副本一部だけが残し、臺北の中央研究院歷史語言研究所に保存してある。初め四川で石印された考釋六冊は、氏が版下の大部分を自から筆寫されたものと聞いて心をうたれた。のちの活字本釋文は、それに氏が訂正を加えたものによつたのであるが、校正をへていないため誤植が多く、石印本を併せみなければならないとのことである。釋文に附した原簡番號のうち、上のものは發掘のさい一まとめごとにつけられたもの、下のものは北京大學で整理のとき、一まとめのうちに於いて適宜つけられたものである。上の番號によつて發掘地を知る資料は今日のところないが、あるいは北京大學にはその對照表があつたかも知れぬ。氏が民國三十一年に居延地方を訪れたところによると、簡のもつとも多く發見されたム・ドゥルベルジンは、イクヘ・ドゥルベルジン（かつて甲渠侯官に比定せるところ）より河

を隔ててやや西にあつていて、これが井井侯官たることは確信して疑わぬという。

（日比野記）